

全体を追う

養老 孟司

(東京大学名誉教授)

脳のことを考え出したのは、若い頃である。ヒトのすることは、科学を含めて、結局は脳のはたらきだ。ということは、医学部を出て基礎研究を始めたときから思っていた。それが後に『唯脳論』になった。ただ、そうした考察が、そのまますぐに「科学」になるとは、むろん思っていなかった。

光トポグラフィーができたのは、私が研究者として適切だと思う年齢が過ぎてしまった頃である。残念だったが、仕方がない。その他の技術は、あるていどの侵襲があって、自分では使おうという気持ちになれなかった。脳波は筋電図の問題があって、情報処理技術が進むまでは、やはり使いにくかった。もっと私が若かったら、きっと光トポを使って、脳の仕事をしたかもしれない。こうした技術なら、対象が人間全体だからである。

私は解剖学を専攻したから、生きた対象を扱うのは邪道だった。横目で機能を考えながら、構造としての脳を調べたいと思っていた。しかし構造の研究も、さまざまな方法が進んで、個人ではすべてには追いついていけない時代になった。どれか一つの方法を採用すると、その専門家になるしかなくなったのである。それでは全体が見えない。

たとえば電子顕微鏡で脳の構造を調べるのは、容易なことではない。一万倍の倍率というのは簡単だが、別な見方をすれば脳が一万倍に膨れてしまう。そんなもの、扱えるのだろうか。そもそも全体をどう見たらいいのか。

自然の世界を理解したい。それが研究の動機だったが、わかりたいのが先なら、そのためには、細かくて厳密な仕事は、いいのか悪いのか、わからないところがあると思った。一万倍にして生きものを見れば、見なければならぬ世界は一万倍になる。拡大したほうが、たしかに世界はよく見える。しかし見るべき世界も、その分だけ増えてしまう。わからない世界も一万倍になる、といってもいい。

分子の時代になって、生物はどこまで拡大したのだろうか。粗いようでも、人間全体を相手にする仕事がいい。その考えは、結局いまでも変わらないのである。